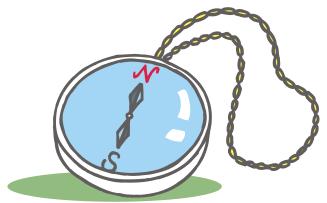


羅針盤



第 19 号

令和7年10月6日(月)

◆ 「世界最弱のヒーロー」

今田美桜主演によるNHK連続テレビ小説『あんぱん』が、9月26日(金)に最終回を迎えました。夫役を北村匠海が演じ、漫画家やなせたかしとその妻となる小松暢をモデルとし、生きる意味を見失っていた二人が、逆転しない正義を体現した「アンパンマン」にたどり着くまでの物語で、愛と勇気に満ちた、生きる喜びを描こうとした作品でした。「強いからヒーローなんじゃない。喜ばせるからヒーローなんだ。」とやなせさんは言います。アンパンマンは小さな子どもたちから絶大なる人気を得ているヒーローではありますが、作者のやなせさんによると、「世界最弱のヒーロー」だそうです。生徒の皆さんもよく知っている通り、アンパンでできた顔が濡れてしまったり、変形してしまったりすると、パワーが出なくなり、ジャムおじさんに助けを求め、新しい顔をつくってもらわないと戦えなくなってしまいます。それでも、弱っている人を見つけたら顔のアンパンをちぎって迷うことなく差し出します。自分が弱るとわかっていても、助けずにはいられない、こうした行為こそが「正義」であるとやなせさんは言います。やなせさんがこのように考えるようになった背景には、彼自身の戦争体験があります。連続テレビ小説『あんぱん』でも、第11週からの2週間は、やなせさん自身が20代で中国に出征し、「大東亜共栄圏」の名のもとに正義の戦いだと信じて戦う場面が描かれました。しかしながら、敗戦で戦争は終わりを告げることとなり、正義の戦いといったものは存在しない、戦争そのものが悪だと価値観が一変します。正義は時代や立場によって全く異なってしまうという現実に直面し、本当の正義とは何なのかといったことを突き詰めて考えることになりました。そして、「飢えている人に食べ物を差し出す」といった、困っている人を助けることこそが正義であるという考えにたどり着くこととなります。「アンパンマン」は、作品がつくられた当初、アンパンを配る普通の男性として描かれました。やなせさんの「正義は政治家や偉い人だけが行うものではなく、普通の人がするもの」といったメッセージが込められていたわけです。悪い者をやっつけることではなく、「溺れている子どもを見て、思わず川に飛び込んでしまうような行為」こそが正義であると考えたのです。だから、アンパンマンはバイキンマンを必要以上に傷つけず、自分を犠牲にしてまでも弱いものを助けます。また、アンパンマンの世界には、たくさんのキャラクターが登場します。その中で異色といえるのが、「ロールパンナ」です。ロールパンナはジャムおじさんのパン工場で、メロンパンナのお姉さんとして誕生しました。生地にはメロンパンナのメロンジュースが混ぜ込まれていて、「人に優しく、人に尽くすように」との願いが込められています。ところが、バイキンマンが送り込んできたロボットにより、バイキン草のエキスが混ぜられて、そのまま焼きあげられたため、善と悪の両面の心を持つキャラクターとして誕生しました。



「みんなを傷つけてしまうから」とメロンパンナとも離れて孤独に暮らし苦悩するロールパンナの姿は、どこか人間らしくもあり、それでもより良く生きていきたいというロールパンナの生き方には、私たちも考えさせられることができます。「アンパンマン」には、やなせさんが考える正義や生き方についてのヒントがたくさん散りばめられているのではないでしょうか。

